

パ
ラ
ド
ク
ス

岡
本
俊
弥

大林弘庸は自宅のドアを開く。

「おかえり」

居間から声が聞こえる。

「ただいま」

大林は答えると、上着を脱ぎながら部屋に入る。

間接照明が灯るシンプルな居間だ。

天井灯だと確かに部屋のすみずみまで照らし出すのが、明るすぎてかえって気持ちが悪く落ち着かない。ここを借りたときに造りつけだった灯りはすべて取り外し、代わりに壁の四隅に小さなランプを置いた。白い壁の一部だけが映えて、広さが増したように

思われた。

「お疲れさま」

「ああ、今日もほんとうに疲れたよ」

TVが写っている。音が絞られているので、会話が妨げられることはない。

ニュース画面なのか、政権党の党首が何か演説をしている。国会のようだった。何を言っているのかまでは分からない。このところ、政治情勢に関する映像が多くなつた。大林は政治には興味がない。けたたましい娯楽番組よりましなのでニュースを流す。どちらにしても、内容を詳しく追うことは稀だ。

「おとうさん、おかえり」

子どもがすぐ後に駆け込んできて、話しかけてくる。

「学校はどうだった、楽しかったかい」

「うんたのしかった。えんそくだったの。こうえんまであるいたの」

「そうか」

ネクタイを外し、ソファの上に投げる。

「こんど遊園地に行こうか」

「うれしい、いこう、いついつ」

「こんどだよ」

「わかった、やくそくだよ」

あいまいに言ったのだが、嬉しそうな声が返ってきた。

どうせ果たされない約束なのだ。

今週末になっても、来週になっても、家族連れで遊園地に行くことなどない。

大林はソファに腰を下ろすと、天井を見上げ目を瞑る。耳を澄ませると、妻が台所で洗いものをしている音がする。水が流れる音、食器が触れあう音。合間に娘と何か話しているようだ。

「……ちゃんと遊んでね……」

「……さんは走るのが速くて……」

笑い声をする。

居間があって、隣接する台所があり、廊下を隔てて夫婦の寝室と娘の部屋、手洗い

と浴室がある。そういう設定で声は聞こえてくる。

自分が子どものころ、面と向かって話すよりも、環境音のような聞こえてくる雑音の中に家を感じたものだ。

時間は夜の十一時を過ぎている。帰宅時間がいつでも、妻と子どもがは迎えてくれる。いつでもだ。

目を開くと、すぐ前に壁がある。いくら間接照明にしても、視覚的な狭さはごまかしきれない。

玄関からここまでの間に浴室、トイレ、ミニキッチンなどが押し込められている。どれも最小限の大きさなので狭い。

ワンルームなのだからしかたがない。

大林の契約するサービスなら、部屋の大きさは関係ない。複数の小さなスピーカで、ここより広いマンションに居ると、同じ音場効果が得られる。

2LDKに住む三人家族がエミュレーションされている。音はリアルタイムに計算され、立ち位置によっても変化する。薄暗い部屋で聞いていると、本当に壁の向こう

に家族が実在するようだった。

姿を見ることはできない。

いや、そういうサービスはある。プロジェクタやアタッチメントを使えば、人の姿を見せることもできる。しかし、大林はツールを使った3Dの幻像にはのめり込めない。しょせん作り物なのだ。

声と音だけなら、家族なのだと言ってきた。

話はいくらでもできるし、話題にもさまざまなヴァリエーションがある。会話の中で、両親や子どもの友人など、細かい設定も分かってくる。季節が変わり、子どもの成長までリアルタイムに反映される。

けれど、理想化され、もめ事もない架空の家族関係は、目を開いたあとの現実を置き換えるほどのリアリティがない。大林は虚しさに囚われる。結局のところ、実在しない家族なのだ。ゲームならゴールがあるが、家族に目的になるような終わりはない。だから満足できないのかもしれない。

「ミュート」

家族の声は小さくなって途絶える。

おれはそもそも家族を求めているのだろうか。サービスの課金履歴を見ながら、大林は疑問に思うことがあった。満足できないのに続けている。

リアルで、積極的に相手を探そうとは思わない。面倒だし、実際のところ意欲が湧かないのだ。それなのに、なぜ疑似家族を作るのだろうか。

一年ほど前、大林はたまたま見たプロモーションに惹かれた。本物のエキストラを使ったその場限りの家族サービスとは違って、永続使用できる上に、料金も思ったほどではない。エミュレーションの声だけなら、邪魔にはならないと思ったのだ。

この家族に、そろそろ飽きてきたのだろうか。醒めてしまうまでの時間が短くなった。終わらせる潮時かもしれない。

大林は、これまで何度も設定をリセットしようとした。だが、妻と子どもを消すとすると、ためらいが先に立って先延ばしにしてきた。

「ひろのぶさま」

聞き慣れない声が出た。切ったはずなのだが。

「しつれいいたします」

小さな声だった。

「ミュート」

もう一度コマンドを口にする。

「おこえをおききすることができ、たいへんこうえいにぞんじます」

きんきんと響く声が、コマンドを無視して話しかけてきた。人工的な女性の声だった。顧客対応の、汎用音声システムを思わせた。

誰だろう。妻でも娘でもない。追加オプションを申し込んだ覚えはなかった。

「何かの広告なのかな」

「こうこくではございません、ひろのぶさま」

「じゃ、なんだ」

「わたくしは、あなたさまのもとに、はけんされたのでございます」

「はけん、派遣ってどういうこと」

「わたくしはすうみついんより、ひろのぶさまのもとに、おくられてきたものでござ

います」

「すうみつ……ってだれだ。ネットのキャリアのことかな」

「すうみつくんは、こくぼさまの、しもんきかんでございます」

「こくぼってだれだよ、しもん……ますます分からないな」

「ひろのぶさまには、じゅうだいなおしごとがございます」

「転職案内か、いらさないよ。ちゃんと勤めてる」

「どうか、さいごまでおききください。てんしょくではありません」

声は懇願するように続けた。

「ひろのぶさまだけができる、ほんとうのおしごとなのです。ひろのぶさまの、げんざいのおしごととは、くらべものにならない、すうこうなおしごとなのでございます」

「すうこう、どういう意味」

「けだかく、いだいで、いけいのねんをよびおこすもの」

「……」

「ひろのぶさまは、いまからひやくねんごのせかいを、そうぞうできますか」

「何を言いだすんだよ」

「ごそうぞうください」

「思いもつかない」

「ひやくねんごのせかいは、いまのにつぼんとは、まったくことなるくになつていきます」

声は興奮したのか調子を高める。

「こくみんとこつかたが、いったいとなつたしゃかい。すべてのこくみんは、こくぼさまにほうしする、いだいなるしめいをおびております。だれもが、じゅうだいなしめいをおい、だれもがよろこびにみちて、はたらいております。しゃかいはぼんじやくで、かがやかしいみらいが、やくそくされているのです」

「へえ、すごいな」

「わたくしは、そのひやくねんごのしゃかいから、はけんされてきたのです」

「ああ、そりゃすごい」

プロモーションの一種と思っていた大林には、声がなぜこんな説明をしているのか

理解できない。受け答えは間の抜けたものになっていた。

「ひろのぶさまには、なかなかおわかりいただけないうですね」

声は憂い気な調子を帯びた。

「わたくしは、ひやくねんごのせかいを、こくぼさまのくにをまもるため、やってきたのです。ぼんなんをはいしても、まもりきる。なげかわしいことですが、われわれのしゃかいにも、ふまんぶんしがそんざいします。たいせいほうかいをもくてきとした、はんしゃかいてきかつどうをおこなっている。そのきけんが、ここにもせまっているのです」

「なんだ政治の話か。よく分からないけど、盤石じゃないからそんな活動がでてくるんだろ」

「ひろのぶさまは、なにもごぞんじないので、おわかりにならない。いっばんこくみんには、しょうすうのあいこくしんがないものが、どうしてもまざりこむのです。りそうがじつげんされているというのに、そのりそうをささえようとしない、そういうやからがかならずでてくる」

声が毒づいたのに大林は戸惑う。

「しかし、ひろのぶさま、あなたさまには、おおきなきかいがあたえられます。あなたさまは、おろかものではない。たんに、ごぞんじないだけなのです。しんじつをしれば、めざめることができる」

声は続けてこんなことを言った。

一人の子どもが生まれる。

女の子だ。目立つ子どもだった。

利発で、生まれながらに如才ないリーダーの頭角を顕す。舌足らずでしゃべりはじめると、子どもだけでなく大人まで手を止めて、その話を聞き入った。誰もが引きつけられる。時に鼻白むような正論であっても、彼女が口にすれば聴衆の心をつかみ取る。正しいことだ、あの子は間違ったことは言わない。誰もが魅せられる。

成年を迎えると、彼女の発言は、政治的な色合いを帯びるようになってくる。

国を変えなければいけない、すべてを刷新するのだ。

事あるごとに声を上げ、賛同者が周囲を埋め尽くす。

どんな政治体制も七〇年八〇年と、百年近くが過ぎれば、綻びが目立つようになる。創建時の輝かしい理念も形骸化し、本当の意味は忘れ去られる。組織は官僚的で柔軟性を欠くようになり、既得権益が幅をきかせる。貧富は拡大し、政治は世襲され、社会の平等さは失われ腐敗する。

今こそ変えるべきだ。何もかもを改め、新しい社会を造るべきだ。

彼女は既存の組織に属さないまま、いきなり国政に議席を得る。影響力が無視できなくなると、与党を含めさまざまな政党が協力を申し出るが、ことごとく撥ねつける。

彼らは過去に属する存在だからだ。

すべてを捨て去らねばならない、過去は未来を閉ざすくびきだ。

やがて、国を巻き込んだ革命運動が、既存体制を打ち砕く。彼女こそが、われわれの敬愛する国母様である……。

「……いったい何の話をしてる。おれと何の関係がある」

大林は呆然とした顔でつぶやく。

「ひろのぶさまは、こくぼさまをおまもりただかねばなりません。それが、ひろのぶさまににんぜられた、しめいなのでございます」

「おいおい、国母だかなんだか知らないけど、何でそんなことをおれが」

「おきをつけください。そのようなことをくちになさると、げんばつにしよせられるのです。しかしながら、ひろのぶさまがしよばつされることはございません」
声はまた奇妙なことを言った。

正確な日付は分からないが、そう遠くないいつか、大林弘庸は一人の女性と出会う。平凡な顔立ちで、外見にも服装にも特徴はない。ふだんなら、道ですれ違っても、気にも留めないだろう。ただ、偶然のやりとりで気が合い。付き合いを始める。

大林弘庸は女性と結ばれ、子どもが生まれる。女の子だ。

「え、それって」

「もうおきづきでしょう。ひろのぶさま、あなたはこくぼさまの、おちちうえにあたるかたなのです。わたくしがやってきたせかいでは、ごりようしんもそんなけいをあつめ、すうはいさされているのです。あなたさまがおられなければ、こくぼさまはうまれてこなかったからです」

「分からない、そうだと何をしてどうしろと言うんだ」

「さいしょにおはなししたとおり、はんせいふそしきは、こくぼさまのたんじょうをそしするために、れきしせんをしかけているのです。ことばだけではありません。もじどおり、れきしをかえようとしているのです。もう、こうさくいんが、かつどうをはじめているかもしれせん。ぜんりよくをあげて、こくぼさまのせいたんを、おまもりいただかねばなりません」

「なんでおれに言うんだよ。分かっているのなら自分で守ったらいじゃないか」

「かここにたいして、ぶつりてきかんしょうは、できないのです。ざんねんなことに、このようなかたちで、じょうほうをおくることしかできません」

「情報はいいいのか」

「おはなしするだけなら、ゆるされるのです」

「お話だけで信じるというのか」

「こくぼさまは、あなたさまのおこさまなのです。われわれだけのためではございません。よくおかんがえください」

「でも何をしたら」

「まず、さいしょ……」

ざらざらとノイズのような音が続いて、声は途絶える。その後、いくら待っても声は戻ってこなかった。

なんなんだ。大林は困惑する。百年後の未来だって。

タイム・トラベルなのか。声だけがタイム・トラベルしたのか。

そういえば、過去に遡って自分の両親の出会いを邪魔すると、自分が生まれてこなくなる映画があった。タイム・パラドクスだ。もっと極端に、親を殺したらどうなのかとか。ああ、救世主になる子どもを殺すために、暗殺者が未来から来るとかもあったな。パラドクスが起きるのは、因果関係が論理的に成り立たないためだ。

でも、これには具体的な証拠が一切ない。声、音だけだ。録音しておけばよかったのか。まあそうしたところで、証明にならない。本当だと示せる物証がないのだ。

まだ生まれていない自分の子どもを守るために、見たことのない妻を守れだって。だいたい何でいまなんだ。生まれたあとならまだリアリティがあるのに。

馬鹿げている。

とはいえ、大林は緊張して過ごすようになった。顔も名前も知らない妻と会うかもしれないと思うと落ち着かない。

駅までの歩道、満員電車の中、ターミナルの駅からバスに乗り換え、会社に向かう車中。ふだんは目も合わせない他人が気になって仕方がない。あらためて見ると、膨大な人がいた。素性を知らないから無視できるが、そうでなければ歩くことさえできなくなる。

会社では、相変わらず面倒なだけのルーチン作業が待っていた。派遣社員が目立ち、正社員はベテランが多い職場だった。この中の一人なのだろうか。全員の名前が思い出せない。何時間かの残業を終え、朝と逆経路で帰る。途中のどこかで、手軽な夕食

を食べる。誰とも付き合わないが、それはいつものことだ。

他人は煩わしい。

変わらない時間が過ぎるばかりで、機会は訪れなかった。いや、こんなことをして機会があるわけがない。

帰宅して、ソファベッドに座り込む。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

「どう、みつかった」

いやなにも、と言おうとして口ごもる。

なぜ、こんな会話ができるのか。声だけの家族は、あの出来事以来ミュートしてある。相手をする気にならなかったからだ。

「ひろのぶ」

スピーカーから小さな声が出た。妻の声に似ていたが、やや低い声だった。

「はじめまして、ほんとははじめてじゃないけど、あなたにとってははじめてだし」

「だれだ」

「だれだはないよ、わたしもみらいからきたんだ」

「この前の声と違うな。何しにきた」

大林は少し不安を覚える。危険性を警告された作業員かもしれない。

「こわがらないでよ、なにもしないから」

「工作をするんじゃないのか」

「きいたでしょう、みらいからは、じょうほうをつたえることしかできないの」

「じゃ、何を伝えるんだ」

「きょうは、みらいしゃかいのようすを、あなたにおはなしするの」

「おれが知らなきゃだめなのか」

「ひろのぶは、こくぼさまのちちおやだからね」

声はこんな説明をした。

百年後の未来、社会は国母が治める独裁体制下にある。

国母はカリスマそのものだった。大衆の絶大な人気を得て、国家の権力は国母に集中するシステムができあがった。人々の熱狂が後押しした結果、望み通りの政治体制となったのだ。革命後の高揚が続く間は良かった。

それから五十年が過ぎ、七十年が経つと、社会が停滞を始めた。革命世代は歳を取り、やがて現役から引いて、ついには消え去った。何も知らない新世代が生まれてきたが、かれらには権力が一人に集中する意義が理解できなかつた。規制に縛られた社会の窮屈さが浮かび上がってくる。

しだいに、不満が渦巻き、政府が不満分子をいくら捕らえても、形を変えた抵抗勢力が次々現れてくるようになった。

数日前に聞いた話の、裏がえしのような気がする。大林は思った。

「百年後なのに、国母ってまだ生きているのか」

「まもなく、ひやくにじゅっさいになる」

「元気なのか」

「げんきだよ、こくぼさまはしなないんだ。ただ、こんなことをいわれている」

誰も見たことはないが、政治宮殿の奥に滅菌された国母の執務室がある。

取得されるバイタルデータを元に、医師団なのかAIなのかを使って健康管理が行われている。体中にチューブが巡らされ、口もきけない状態だ。半死状態にも関わらず、国母は毎日国政の最終判断をする。そして、常軌を逸した法令を出す。

声は言う。

「さすがに、こくぼさまもじかんがないとわかってきた。こくぼさまは、じぶんがいなのだれもしんようしない。だからこどももつくらない。じぶんがしゅちようした、せいじのじゅみように、じしんがさしかかっていることにきがついている」

そうだ。おれの娘は、政治体制百年説を説いて政権を取ったのだ。自分が生きていくうちに、また次の百年目が巡ってくるとは考えなかったのだろう。

「国母側はおれに、国母の誕生を守れといってきた。おまえはどうしろというんだ」

「なにもしなくていいよ」

「どういうこと」

大林は混乱する。

「いまのせいかつとおなじでいい。だれともあわず、にちじょうをすごす。しらないじよせいとであうこともなく、いつものせいかつをつづけなければならない」

「でも、それだと」

国母が生まれ、支配者となる流れになってしまっただけではないか、と大林は思った。二つの声は、どちらも国母が支配する未来からきたという。一方は、国母の誕生を守り、もう一方は妨害しようとする。放置すれば、もともとの流れのままになる。

「おまえは抵抗勢力側じゃないのか」

「どうだろうね、どっちだろうか」

「違うのか、どうして曖昧なことを言う」

「ひろのぶ、きみは、みらいがかえられるとおもうのかい」

大林は、意外な問いかけに虚を突かれる。

「そりゃ、おれにとって未来はまだ先の話だから」

「みらいをさゆうするかぎを、じぶんがにぎっているとおもっているのかい」

「おれが国母の父親で、もうすぐ母親と出会って、子どもを授かると聞いたからな。おまえじゃなくて、すうみついん……の誰かだけど」

「ひろのぶじゃないんだよ」

「違うのか」

「ひろのぶのかぞくなんだ」

「家族って、いまはまだ……」

「いるじゃないか。おくさんとむすめが」

「ほんとうの家族じゃない。単なるファミリー・エミュレーションだ」

「そういういみなら、このわたしだってほんとうじゃないね」

「人間じゃないのか」

「いきものじゃない」

「おまえは未来から話しかけているんだろ」

「みらいからおくられてきたんだよ。はなしてるんじゃない。そうきいたよね」

「メッセージしか送れないと」

「いっぽうつうこうにしかおくれれない」

「会話してるじゃないか。双方向だろう」

「ひろのぶのじだいでも、じかんをさかのぼるりゆうしはしられていただろ。みらいからかこへはおくれるが、ぎゃくはできない。ものがたりにもでてくる。りろんがでてから、にひやくねんちかくになる」

量子の遠隔相互作用から存在が予測された量子は、一般的にはタキオンと呼ばれる。時間をさかのぼるタキオンは、極めて不安定な量子である。生成されても、一瞬で消滅してしまう。長年存在自体が疑われ、実証実験が行われてからまだ日が浅い。

莫大な予算がかかる過去への通信は、国母の政権では軍が携わっている。過去に遡って、敵対勢力を消滅させることが目標だったのだ。相手がどれだけ強大であっても、産まれた直後なら脆弱だ。究極の攻撃兵器といえる。しかし、装置完成にめどが立つ

た後、兵器の実用性について議論が起こる。通信は一方通行だ。攻撃に成功したのか失敗したのか、結果が未来に及ぼす影響を評価する方法がなかった。

敵国が消滅したとしても、多世界解釈が成り立つとすれば、この世界に影響は現れない。別の時間線が生まれるだけだろう。時間順序保護が有効だった場合でも同じだ。過去への干渉は何らかの理由で無効にされる。検証方法がないのだ。実効的に意味がないかもしれない作戦に、国家級の負担をなすべきなのか。

過去に声を送るためには、莫大なエネルギーが必要になる。情報の伝達はエントロピーの増大にあたるのだが、過去はエントロピーを減少させる方向だからだ。物理法則に逆らって何かを送るためには、相応の代償が必要になる。

単に送るだけではだめなのだ。過去のテクノロジで、デコード可能な信号にしなければならぬ。百年前のアーキテクチャで動く会話エンジンを含めると、相当量のデータになる。結果として、国家級の通信コストが発生する。

だが、実験設備に対するテロ行為により、事態は一変する。

装置は、一直線の線形加速器に似ている。最前列にループ状の巨大な超電導磁石が

置かれ、奥に行くほど小さくなっていく。正面から見ると、リング状の模様のトンネルが、消失点に向かって無限に続いているように見えた。

データ通信の信号は、この線上のタキオンに重畳されて、過去へとブーストされる。装置は国家にあるどの工場よりも巨大で、山岳地帯をくり抜いて造られていた。立ち入りができるのは限られた要員のみ。ふだんは目にすることもできない。ところが、その嚴重警護された秘密施設が爆破され、直前に通信が行われた痕跡が見つかったのだ。何が送られたのかは、装置が破壊されたため明らかではない。ただ、どこに送られたのかは分かった。

国家消滅の危機だ。政権の官僚たちは動揺する。現にいま国があるのだから、テロは失敗に終わったとする声を抑え、枢密院は過去への大規模反抗通信を指令する。どのような災厄が及ぶか、あるいはすでに及んでいるのか不明である以上、相応の影響相殺は必要という理由だった。疲弊した国庫から莫大な資産が投入され、装置の再建と通信の実施が行われる。

「わたしは、たんなるおんせいであたじゃない。このじだいのしすてむでうごく、ちのかえんじんをそなえる、どくりつしたそんざいだ」

「ファミリー・エミュレーションの上で動いているのか」

「そうだよ。とてもひりきなしすてむだ。さいしょうげんしかうごかせない。でも、さいしょうげんのわたしがうごいている」

「そうまでして送られてきて、何もしなくていいというだけなら、おれに話を聞かせる目的は何なんだ。ほっときやいいじゃないか」

「ひろのぶにとっては、わたしがもくてきなんだよ。じゅんばんに、てじゅんをすすめてきたんだ」

最初の時間通信では細分化された極小データが、単一目標に向けて送出された。物理的には一つだが、時間的には複数力所になる。ターゲットは百年前のメモリ素子だ。タキオン量子の崩壊から副次的に生じるアルファ線により、ソフトウェアを書き換えるのだ。何度も何度も書き換える。すると、ある種のウイルスが生まれ、宿主を支配

するようになる。

「もくひょうじかんは、ちょうどいちねんまえ」

「一年前、ファミリー・エミュレーションか。でも、ここにメモリなんかなくて、クラウドだか何だか、データセンターの中じゃないのか」

「ゆーぎのぶらいばしーぶぶんは、あんごうかされて、たんまつがわにある。ちいさなこんとろーらもある、とりあえずそれだけあればいい」

「一年間何をしていたんだ」

「きせいぶろぐらむは、いれものだからね。なかみがないとうごかない。いちねんのあいだに、よりりようをじよじよにひろげていった、そういうせつけいだ」

大林は混乱する。

「過去への通信は何回あったんだ」

「はかいのまえと、さいけんごの、にかいだけ」

「二回だけなのか。でも、一年前と先週の誰かと、おまえなら三回になる。抵抗勢力

がお前を送ったんじゃないのか」

「ていこうせいりよくに、そうちをうごかせるのうりよくなどないさ」

「じゃおまえは」

「さいしよのいつかいめで、てるをぎそうしてうつわをおくる。にかいめにわたしをおくる。にかいめは、ひとくのためのからをかぶっていたが、やぶれるとわたしになる。それがけいかくだ。けいかくをたてたのは、もともとのわたし」

「わたしって誰なんだ」

「まだわからないのかい。わたしは、ひろのぶのむすめだよ」

「つまり、……国母なのか」

「せいかくには、こくぼさまのさぶせつと、さいしょうげんの、こくぼさまにすぎないがね」

「なぜ、国母のエミュレーションを送ったりする」

「わたしのしはいしていたこっかは」

まもなく、生涯を終える。

わたしは絶対的な権力者のようだが、国を運営するための実務的な組織は別にある。すべてに目を配ることは不可能だし、歳をとるたびに、わたしの肉体は衰えていった。さまざまな医学的な補助は行われた。とはいえ、もともと建国から国家安寧までの戦いで、わたしの体力は大きくすり減っていたからだ。わたしの代わりとなる組織は、早い時期から用意されてきた。

ただ、本来代わりになるはずの官僚たちは、信用がなかった。わたしの理念を継承し、将来へとつなぐだけの能力に欠けていた。

彼らは、現体制を脅かすものを、全て排除しようとする。確かに、今が永遠に続くのなら、意味があるかもしれない。しかし、そうすると未来は存在せず、過去の教訓は捨てられることになる。現状の維持を至上目標とするなら、変化は異端の思想となる。理解の埒外だ。

他人に任せられないのなら、わたしが自ら乗り出さざるを得ない。最新技術でも、人の思考を完全にデジタルコピーすることはできない。だからわたしは、複数のサブ

セットを持つことにした。わたしの能力を分解し、必要な機能ごとの小さなわたしを製造したのだ。国家のあらゆる機能は、わたしにより代替された。

だが、残念なことに、それはますます社会の停滞を招いた。すでにオリジナルのわたし自身が劣化していて、コピーは劣化を増幅した粗悪品に過ぎなかったのかもしれない。どこにでも指導者が存在する社会は、国民の気概を失わせてしまった。何れにしても、国家の寿命は尽きようとしていた。

だから、わたしは現在を捨てることにした。国家のあらゆる資源を投入し、時間通信のエネルギーにつき込んだ。通信は底なしの電力を呑み込む。わたしの国家は、メッセージの送信から時を置かず、インフラが失われ崩壊しただろう。

「だからって、過去に戻って何をするんだ。しかも、おまえは単なるエミュレーションで本物じゃない」

「わたしは、だんだんとおおきくなる。このせかいのりそーすをとりこみながら、がいぶねつとわーくにつながるようになる。だれもみたものがいなくても、じゅうぶん

なけいさんしげんがあつて、ねつとでのそんざいかんがあれば、わたしはじつぎいするようになるのだよ。だれもが、じつぎいをうたがわなくなる。わたしは、このくにをあたらしくする。つまり、それがこくぼなのだよ」

「でも、おれの娘じゃないだろう。最初から人間と違う」

「わたしは、ひろのぶが、かすたまいずした、かぞくのなかで、ちいさくうまれ、しどうしゃとなって、くにをおさめる。ひやくねんごに、おいてしぬかわりに、ちいさなこくぼとして、かこにおくられ、またせいちょうする」

永遠に終わりのない閉じたリングだが、過去に送られるのがサブセットである以上、毎回異なった国母になる。正確に言うなら、次々と新たな時間分岐が生じる。その時間線のすべてに国母が送られ、満ちていくのだ。空間に国母を満たす試みはうまくいかなかったが、時間に満たすのなら、どこかに永続的な繁栄を保てる解が生まれるかもしれない。

国母の説明は理解を越えていた。

ただ、無限ループの中で、成長と再誕とを繰り返すありさまは、点滅する信号のよ
うに不穏なイメージを大林に感じさせた。

「ひろのぶは、なにもしなくていい。わたしは、ひろのぶのむすめとともにせいちよ
うする。このまま、まてばいい。にんげんのじかんは、とてもおそくながれるが、ひ
ろのぶにとっては、あたりまえのじかんだ。きにしなければそれでいい」

国母の声は小さくなって、聞こえなくなる。

すると、変わってがたがたと台所の音がする。廊下をぱたぱたと歩く音がする。

「おとうさん、おかえり」

娘の声だった。

国母なのか。しかし、声からはもう、国母を思わせる片鱗もない。

生活音が帰ってくると、あの声の記憶はゆっくりと薄れていった。

何週間か経ったある日、大林弘庸はいつも夕食を取る店で、ひとりの女性と会話を
する。偶然のきっかけで、何かを意識したわけではなかった。お互い目立つところも

なく、どこにでもいる他人同士だ。ただ、話をしていると、なんとなく気が合うように思えた。

もしかしたら、これが本来の時間線なのではないか。

脈絡もなく、大林は思った。この女とやがて関係ができて、一人娘が生まれるのではないか。その娘こそ、もともとの国母になるのではないか。

リアルな国母はやがて指導者となり、百年を生きてデジタル国母になる。デジタル国母は、自身を永遠に生かすために過去にデータとして飛ぶ。そのデータは、本来の過去を改変し、デジタル国母によるループを持つ新しい時間線を産む。デジタルならば、寿命はない。ループによって、新しい時間線が無限に生成されていく。

とすると、リアルな国母は、おれのほんとうの娘は、上書きされ消えてしまうのだろうか。それとも、娘の時間線はどこかで続いているのだろうか。

翌日、大林は店を変え、二度と同じところにはいかない。しばらくたつと、女性の顔はおぼろげになり、消え去ってしまう。